人権ほっと28年11月号

「ガラスの天井と地下室」

大阪教育大学准教授
安達　智子

皆さんは「ガラスの天井」という言葉を聞いたことがありますか？　これは少数派の頭上には目に見えない天井があるかのように上昇や活躍の機会が阻まれる状況を言い表したもので、女性の社会進出の難しさをさすこともあります。たとえば、ある女性社員が同期の男性と同じくらい業績を上げていても、挑戦のチャンスを得にくい、昇進が遅れやすいといった場合、この女性はガラスの天井にぶち当たっているのかもしれません。

しかし最近では、安倍首相がアベノミクスの柱として女性の登用を推し進めており、日本でも企業の役員やＣＥＯに登用される女性が増えてきました。また、政治の世界では、小池百合子氏が初の女性都知事になったことは記憶に新しいと思います。

一方、男性の生き辛さに着目したものには「ガラスの地下室」があります。男性は、危険に身を晒したり肉体的にきつい作業を担うことが多く、また、個人の事情や思いに関わりなく働き通すことを期待される、このような状況を、男性はガラスの地下室に押し込められて労働を強いられると言い表しているのです。

「ガラスの地下室」という表現は1990年代にアメリカで提唱されたものですが、最近では日本においても男性の生き辛さに関心が向けられるようになって来ました。たとえば、辛いときに弱音を吐いたり愚痴を言ったりせずに、悩みや苦しみを自分の内に抱える人は男性に多く、長時間労働によって病気になるのも過労死する人も圧倒的に男性が多いのです。

ガラスで出来た天井や地下室は、この目で見ることは出来ません。けれども、性別の枠に縛られた社会に確実に存在して人々を生き辛くさせている障害と言えるでしょう。